

漱石『猫』の「顔論」

Junko Higasa

『吾輩は猫である』にスターンの「鼻論」を取り込んだ漱石が、第五章で展開したのは「顔論」である。

人間の顔については、古代ギリシャのヒポクラテス、アリストテレス、プラトンの「栄養質・筋骨質・心性質」を基本とする人相学、18世紀ヨハン・カスパー・ラヴァーター(Johann Casper Lavater)の「人間の本性は容貌に現れる」観相学、19世紀フランツ・ヨーゼフ・ガル(Franz Joseph Gall)の「人間の精神は頭蓋骨の形に現れる」骨相学という具合に、人間自身が研究を重ねてきた。その学問的統計を重ねていくうちに人間は、これだけ多くの人間を製造しながら誰一人として同じ顔を作らなかった神の手際に驚き恐れ入った。何故恐れ入るかといえば、特に耶蘇教においては、人間に成し得ない仕事・解明できない仕事は「神の仕事」と見なされるからである。『古代の神は全知全能と崇められている。ことに耶蘇教の神は二十世紀の今日までもこの全知全能の面を被っている』『神の手際」と判ぜらるる事は、自然伝播により人間の間にひとつの流行を作る。流行とは意志による選択ではなく、人間を驚かせる理由を掲げた突出傾向に惹かれる自然模倣である。

この観点から、まず face を「顔」と訳して見てみると、他国を制圧し領土を広げる力を持つ顔に自慢の潮流を与えた耶蘇教の神は、世界に対して 20 世紀の今日までも全知全能の「支配力」を誇示し続けている。それは白人以外を劣等なものとして捉え、黄禍論を掲げて東洋人を差別し、西洋社会の動向に沿わない日本古来の「あばた面」を劣等な者と捉え、利己主義を隠した「紳士淑女面」が攻撃するという現状をもたらしている。しかし実際には黄なる顔を持つ日本人は欧米と同じことをやったまでである。

「あばた面」を持つ教師は、露西亜と戦う軍人同様に日本古来の精神を継承している。要するに西洋も東洋も同じことをやっているのに、行いは違えども心の中では同じ日本人魂を持っているのに、人間は平面に目が二つ並んでいるから、物事の半面しか視野に入らず、形だけで同類の価値を判断して他人を攻撃するという、自己の顔の醜さに思い至らないのは気の毒な次第である。他国を征服する人間が他国に征服されて怒る。戦争に行かないで儲ける人間が戦争に行かないで貧する人間を批判する。彼らにぜひ鏡を見せてやりたい。しかしそれによって自己の行いに気付くかは疑問である。人間は同じ材料から出来ている同一生物である。それにも拘らず人間同士が互いを人間として認識していないのは、神が人間の顔を同じに造り損ねた結果であるとも言える。もし神が人間同士区別がつかないよう悉皆焼印の御かめの如く人間を造り得たならば、人間は自分も他人も同じ人間であることを知り得たであろう。このように人間に自分が何者であるか悟らせなかったのは、神の無能力のせいではないかと疑っていたところへ、好男子水島寒月君と同じ顔の泥棒が現れた。『神もこんな似た顔を二個製造する手際があるとすれば、決して無能を以て目する訳には行かぬ』これこそ確かに「人間」という同一生物を作ったという神の製作能力における全知全能を証明するものである。

さて、次に face を「文面」と訳す。「神の視点」(三人称一元視点)を頭に抱く全面描写に自然追従した文面に、今日これほど目まぐるしきまでに異様な変化を生じせし

